

第5回 地域リーダー・有識者との意見交換会議事概要

1. 開催日 平成15年11月21日(金) 13:30~15:00
2. 開催場所 さいたま新都心合同庁舎2号館5F 共用大会議室501
(埼玉県さいたま市中央区新都心2-1)
3. 出席者
(1) 講師 練馬区立八坂中学校 学校栄養職員 飯島敬子 氏
練馬区立在住の農業者 小澤成実 氏
(2) 関東農政局 局長、局次長ほか局職員

4. テーマ
「顔の見える交流」による都市農業の推進

5. 講師の紹介

飯島敬子 氏

昭和51年練馬区立八坂中学校に勤務。その後、同区内の学校給食調理場、小・中学校勤務を経て現在に至る。その間、管理栄養士として武蔵丘短期大学で教壇に立たれるなど、学校給食を通して食のあり方に対し、熱心に取り組まれている。

小澤成実 氏

平成7年に脱サラして就農。農地面積2ha、パイプハウス2棟を有する。「安全・安心で新鮮な野菜を出荷販売します」をモットーに、環境保全型農業に取り組む。地元学校給食向けに野菜を提供するなど、積極的に都市農業のあるべき姿を追求されている。

6. 議事概要

飯島氏から、子ども達のために、安全・安心で新鮮な地場産農作物を学校給食に取り入れるようになった経緯と、学校給食を通じた環境保全の取組についての講演。

小澤氏からは、学校給食との関わり、環境保全型農業の取組などを通じ、都市農業を支える若き農業者としての抱負などについて講演して頂き、生産者と消費者の顔の見える交流について意見交換を行った。

7. 講演概要

(1) 飯島氏

学校給食に地場産農作物を取り入れるようになったきっかけ

・アンケート調査によると、家庭で緑黄色野菜を毎日食べる習慣がついている子どもは約5割であり、子どもの野菜離れが進んでいるという現状がある。また、食物

アレルギーを持った子どもが増加傾向にあるのに、給食では子ども達が食材を選ぶことができない。農薬問題など食品の安全性への疑問があった。そこで、給食を作る側の立場から子ども達のために安全なもの、地場で作った顔の見えるものを食べさせたいと考えた。

・そして、農地の大切さや生産者の苦勞を知ってもらいたい、美味しいかどうか、安全であるかどうかを判断できる大人に育てほしい、食材の知識を伝え、感謝の気持ちや食への関心を高めたい、という思いを込め「給食こそ安全で安心できるものを！」を目指し、練馬区立中学校教育研究会給食研究部で活動を開始した。

・活動の中で、学校周辺で農業を営んでいる保護者の方と出会い、研究グループのメンバーと生産者グループとの交流が始まった。地場産農作物の学校給食への取り入れに向けて話し合い、経費の面でも農家の方に低価格で提供していただくなど、少しずつ問題をクリアしながら、地場産農作物の学校給食への取り入れを実現した。

平成13年度からの活動等（学校・地域での取組）

・小澤さん宅で作っただいこの残留農薬検査等を実施した結果を報告したり、生産者の声を「絵たより」で紹介したことにより、減農薬の地場産農作物を使っている学校給食に対して先生方や保護者の方の関心が高まった。また、食べ残しや生ゴミを肥料化（コンポストを利用し堆肥を練馬の大地に還元）していることを掲載することによって、環境問題やゴミ問題、さらにはバイオマスについても父兄に関心を持ってもらっている。「給食だより」では地場産野菜をはじめとした旬の食材の紹介や、給食を通して食事についての正しい理解が得られるような記事を掲載。また、学校給食に関するアンケートを実施し、意見・要望を今後の運営に役立てている。



今後の地場産農産物給食契約栽培の展開

・子ども達に安全・安心で新鮮な地場産農産物を提供する給食を充実させるため、地場産給食研究部を設け、地場産農産物の素材を生かした新献立の研究などに取り組む。また、生産農家とのネットワークを更に広げていきたいと考えている。

(2) 小澤氏

東京農業の現状と課題

・現在、脱サラして野菜を作っている。都内の農業も昔とは様変わりしてきており、重量野菜から葉もの類など軽量野菜へ転換されてきている。また、市場は値動きが激しく、道路渋滞で市場への出荷に時間がかかりすぎるなど農家にとってデメリットが大きくなってきている。このため、お互いに顔の分かっている人に供給できる地元への直売に変わりつつある。

学校給食への関わり

・減農薬栽培に取り組んでいた折、学校の体験農業学習にも協力。子ども達に種まきから体験をさせ、収穫の喜びを知ってもらった。また、低農薬栽培で育てたものを提供し、普段、店頭で売られているものとは、味がまったく違うということ子ども達に知ってもらった。中には野菜嫌いが治った子もいた。

・そのような中、練馬区中学校給食研究部から学校給食へ野菜を供給してくれないかとの持ちかけがあり、子ども達に安全・安心で新鮮な野菜を食べさせてあげたい思いもあったので、賛同し、地域の仲間とともに契約栽培を始めた。

環境保全型農業の取組状況と今後の思い

・平成13年に若手農業者15人の仲間と新農業システム研究会を発足。エコ農法に取り組み、農薬を減らすためフェロモントラップやイーザーネットハウス栽培を導入した。また、生産工程管理表を作成し、販売する場合は、生産履歴を添付している。今後は、更に詳細な内容を記す方向で検討している。

・今日、安全・安心が注目されているが、以上のような取り組みをしながら大都市東京で農業を続けることによって、地域の人に農業の大切さを理解してもらいたいと考えている。



農政局に対するお願い

・ここ数年、生産者は、安全・安心な農作物の生産に努めているにも拘わらず、そのことが消費者にあまり理解されていない。出荷にあたっては、規格の揃った見た目のよいものが要求されるが、農薬を制限して作ったものは見た目は落ちる。そのようなことを消費者に理解してもらえよう取組をお願いしたい。

8. 主な意見交換の概要

・局側から、献立づくり、納入業者の選定、価格の設定など現在の学校給食のしくみ、給食時間や食べ残しなどの現状、学校給食を通しての家庭での食生活の改善状況等に対する質問が出された。飯島先生からは、学校給食に携わる栄養士や調理師が、日頃から思っている食の大切さについて、農政局からも一般の方にPR等をもっと積極的にしてほしいとの要望があった。

・小澤さんには、局側からエコファーマーの認定状況について質問が出され、現在は認定を受けてはいないものの、常に環境保全型農業に心がけ、自分で自信の持てる商品を作り、工程管理表を開示し、自分で販路を見い出して勝負したい旨の発言があった。

・消費者が安全・安心できる食べ物を必要とし、生産者もそれに応え、これからの進むべき農業の姿を目指す、という目的の一つにした都市農業のあり方について考えさせられた意見交換会となった。

